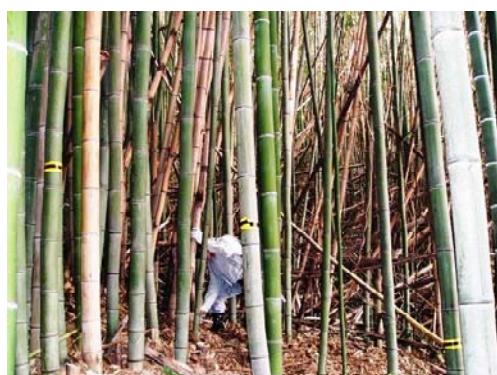


# 森林環境税を活用した 里山林再生の取り組み

~平成18年度 里山林機能回復整備事業の記録~



平成19年8月

奈良県農林部森林保全課

## 目 次

【団体名の五十音順で掲載しました】

○五反原の里の里山林整備	《生駒里山を守る会》	1頁
○力を合わせて里山林の再生を (蘇れ西畠町向山)	《いこま棚田クラブ》	3頁
○里山を守ろう・生かそう・学ぼう! ~水間地区の里山整備を通して~	《NPO法人 きゃんす家》	5頁
○子ども里山探検基地づくり (~子どもの笑顔を求めて~)	《NPO法人 山野草の里づくりの会》	7頁
○竹やぶが竹林に蘇る 太陽光が差込み、野鳥がさえずる竹林	《NPO法人 やまと新発見の会》	9頁
○奈良市荻町里山林整備 (「はなはなビレッジ」後背地の里山林整備事業)	《都祁の里山を守る会》	11頁
○里山林機能回復整備事業への取り組み ~虫と子どもがいっぱいの里山をめざして~	《虫いっぱいの里山づくり隊》	13頁
平成18年度里山林機能回復整備事業について	15頁	
	《奈良県農林部北部農林振興事務所》	
中部農林振興事務所における里山林機能回復整備事業の取り組み	17頁	
	《奈良県農林部中部農林振興事務所》	
森林ボランティア安全技術研修の実施	19頁	
	《奈良県農林部森林保全課鳥獣緑化保護係》	
平成18年度里山林機能回復整備事業実施箇所一覧表	21頁	
あとがき		

## 五反原の里の里山林整備

生駒里山を守る会  
川名國夫

生駒市小平尾町小字チロクの谷にある「五反原の里」が、「生駒里山を守る会」の活動地。生駒谷のほぼ中央、平群町との境に近く、千光寺付近から流れる大谷川、国道308号線「暗峠」から流れる神田川の間の「向山」山稜の山麓南面。棚田3ha,雑木林3ha,足らずの、10人もの地主さん達にお世話を頂いたエリアで、平成12年より手刈で経営を始めた「癒しの里」。



棚田と里山

里の施設は手作り、リサイクル資材を使って、炭焼の土窯、パン焼石釜、大竈、大囲炉裏、展望休憩所、作業員詰所、ドキドキロープウェイ、モンキーブランコ、ツリーハウスがあつて、近隣の幼稚園や保育園児の野外学習、保護者たちのさまざまな野外パーティ、近隣の家族ピクニックに使われる。東大阪市の小学校低学年からも、500円内の遠足でやって来る。



里の施設



稻刈り

棚田では、6月に赤米、黒米、古代米の田植え、10月に稻刈り、これに100人が参加してくれる。子供たちは泥んこだ。地主の方々が感謝して、協力してくださる。

生駒市では、平成18年に森林環境税が導入されると、助成対象作業場として、「五

反原の里」と暗峠のいこま棚田クラブの2箇所が認定されました。作業地は事もあろう以前に働き掛けた地、ともに「むかいやま」山稜の南北で、麓付近と中腹にあります。

平成18年11月より、「生駒里山を守る会」メンバーと、森林ボランティア十数人が、計5回にわたって入山。荒れた雑木林は、立ち枯れが多い。森林ボランティアの手際よさが光る。シルバーの方は一人で、結構手早く作業する。女性は安全感覚がいい。安全に小じんまりと、下刈の草木を斜面に水平に積重ねてくれる。しかし安全は逐次呼び掛ける。



間伐



片付け

「五反原の里」の里山は棚田への水利水路が、山の池から下ってくる。平成18年度は里道から水利水路までとした。手入れの後の明るさは、まず、歩きやすい、斜面を駆けてみたい、鼻歌が出る、青空に叫びたくなると言ったような変わりようだ。水利水路から未手入れの雑木林をみると、タイのクワイ川付近の密林よりも荒れている感じ。見た目もやはりひどい。



整備された里山



生駒里山を守る会メンバー

3月、森林環境税の助成作業の継続が決定した。四苦八苦しながらも平成19年度に繋がった。

4月、幼稚園年長組が野遊びに来た。5月筍狩り、7月七夕の笹採りと短冊つるし、9月は虫追い。10月芋掘りなど。近隣は観月音楽会、餅搗パーティ。森林では隣地が手入れを要請してきた。里山が明るくなると、里は見事に活氣づく。伐木は大型チッパーで森に戻したり、木炭にすると、CO<sub>2</sub>を固定化し、温暖化阻止になる。里山の活用も模範的になる。森林ボランティアの仙人は、今年も森の鋭気・妖精たちとのふれあい、出会いを楽しもうと意気込みも高い。里の棚田人が炊出しや沿道の整備で共働してくれて、「五反原の社の祭」を開いて、仙人と里人の交換を盛上げたい。

## 力を合わせて里山林の再生を (甦れ西畠町向山)

いこま棚田クラブ  
明石嘉一郎

### ① 団体の紹介

奈良県生駒市西畠町に広がる棚田・里山は、その昔鑑真和上や遣唐使が通ったとも云われ、江戸時代には、参勤交代の大名や松尾芭蕉が通ったといわれる暗がり越え奈良街道（現国道308号）沿いに広がる歴史的にも由緒ある地域で、「荒廃した里山や棚田を整備することにより、自然環境の保全をはかり、生物の多様な環境に再生する」、「都市部の小学生対象の環境教育、情操教育の場として自然観察会、農事体験会の場作りとイベントを通じて子ども達に自然の素晴らしさと大切さを伝える」、「都市住民と農村の交流を活発にし、地域の活性化を図る」、「リタイアした都市住民（団塊の世代）の新しい活動のモデル事業として多方面に働きかけ社会的ニーズの喚起をはかる」等を目的に平成15年10月「いこま棚田クラブ」を発足し、今まで活動を継続している。



棚田と里山

### ② 整備内容等について

里山林機能回復整備事業は、西畠町向山を整備場所とし、平成18年度より平成20年度の3年間、作業を実施することとした。集団での作業を行う為、安全第一を基本に「野鳥等の繁殖期」、「夏場での作業回避」、「農作業の繁忙期」、「他の作業」等を考慮し計画の完成を目指した。

- 初年度（18年度）の整備内容は次の通り。

実施日	区域	作業内容	参加者
11/27（月）	I	下草刈、枯木処理（抾抜）（整理）、伐採木整理	15名
12/25（月）	II	下草刈、竹林伐採整理、枯損木除伐整理	10名
2/26（月）	III	倒木整理、伐採木整理	13名
3/26（月）	IV	枯損木整理、倒木整理	15名



作業前の鬱蒼とした林分

作業後

- 整備活動をとおして気づいたこと

整備実施前の植生チェックの大切さ、作業前に整備方法の説明（枯損木の処理の仕方、草の集め方、集積場所の設定、伐採木の処理の仕方）を徹底する。事故回避の一層の努力。

### ③ 整備場所の利活用について

利用活動状況・・クヌギ・コナラを植樹（植樹者、生駒市子供会育成協議会リーダー研修会の小学生と父兄）

シイタケ栽培

森林散策

伐採竹を活用しての工作会（小学生）ならびに伐採竹による竹炭つくりと畑の土壤改良に活用

今後の利用予定・野鳥観察会、植生調査



クヌギ・コナラの植樹

里山を守ろう・生かそう・学ぼう！

～水間地区の里山整備を通して～

NPO 法人 きやんす家

代表 井立廣美

### 【きやんす家について】

きやんす家は、平成18年12月、NPO 法人格を取得した、芽が出たばかりの新しい団体です。メンバーは、奈良女子大学の学生、社会人が中心です。私たちは、子どもたちが自然や里山に親しむきっかけをつくりたい、という思いから活動を始めました。事業内容としては、森林環境教育、里山林機能回復整備事業を行っています。

今、里山林の荒廃が叫ばれています。都市近郊や集落周辺でも、手入れが行き届かず放置された竹林や広葉樹が目に付きます。しかし、いきなり里山保全を、といつても、都市部に住む人たちは、なかなか里山身近に感じるきっかけがありません。そこで、きやんす家では、家族で里山に遊びに来てもらえる機会をつくろう！と考えました。都市部の子どもたちや家族に、自然に親しみ、関心を持つてもらうことが、ゆくゆくは里山の保全につながっていくと思うのです。

### 【里山整備内容】

きやんす家が活動しているのは、奈良市水間地区です。平成18年11月から、水間町の里山、1.0haを中心に行なっています。整備回数は5回ほどになります。0.5haが整備済みです。活動を通して、里山整備の難しさを感じています。一日に整備ができる範囲は少なく、思ったように進まないのが現状です。



整備中



下刈り作業

しかし、一方でやりがいも感じています。間伐する前は暗くてさみしい雰囲気だった里山が、間伐した後には、山の中には柔らかな光が差し込んできます。作業の疲れも癒されていきます。整備によって森林の機能が回復していくれば、地域の景観の回復、災害の発生の減少、水資源などの充実といった変化が生まれます。それは、周辺の集落、さらに都市部に住む人々の生活を豊かにすることにもつながっていくといえます。



整備前



整備後

#### 【整備場所を利用して】

間伐の跡地には、わさびを植えています。適度な立ち木を残した山の中は、わさびの生育環境にはぴったりです。まだ収穫までは時間が必要ですが、加工して、特産品作りをしては、という話もあります。

思ってもみなかつた効果もありました。整備場所を通じて、地元の方々とつながるきっかけができたのです。地元の方々の協力のおかげで、きやんす家では、今年4月、水間でイベントを開くことができました。参加者は37名。都市部の子どもたちとその家族、そして水間地区の人たちも駆けつけて下さりました。当日は、身の回りで収穫したもの、季節の食材を使って調理をしたほか、水間地区の里山へ散策に出かけました。参加者の方に、里山の豊かさやめぐみ、またその現状を知ってもらう機会にもなりました。今後はこの整備場所を利用し、本格的に子供たちへの環境教育を進めていきたいと考えています。



山菜



水間でのイベント

きやんす家の「きやんす」は、「来る」という意味の方言です。私たちは、たくさんの人たちが集まって交流をする、そんな場を提供できる団体でありたいと願っています。今後も里山林の整備を進め、さらに整備場所の利用をしていくことで、都市部、山間部という地域や、子供から大人という世代を超えた交流を実現していきたいと思います。

## 子ども里山探検基地づくり (～子どもの笑顔を求めて～)

NPO法人山野草の里づくりの会

### ①団体の紹介

NPO法人山野草の里づくりの会は、大和川本流の源流地域で標高400～500mの大和高原の一角に位置する桜井市の東北部で里地里山の保全活動を行っています。

中山間といわれるこの地域では、農林業の不振からか人口が減少し、しかも高齢化により多くの山林、農地が管理されなくなり、過去の美しい景観が失われ、また山野草や昆虫類の多くが姿を消したり減少しています。この流れを食い止め、過去の状態に少しでも近づけようと放置山林や遊休農地の復旧と活用や山野草自生地の保護を行っています。この地域にはまだ630種を超える植物が自生しており数多くの昆虫や両生類、鳥などが生息しています。この豊かな里地里山の景観や自然を活かしたまちづくりにも取り組んでいます。

年4回、多くの人々に自然に触れていただきこうと「花の宴～自然を楽しむ会～」を開催するとともに、この豊かな里山の自然を子ども達に楽しんでもらい、自然保護の必要性を少しでも感じてもらえばと子ども達と保護者の皆さんを対象とした「キッズ自然体験」も年数回実施しています。



### ②整備内容等について

今回「里山林機能回復整備事業」として、クヌギ、コナラ、クリ、ネムノキなど生えている里山林を「子ども里山探検基地づくり」として整備しました。

笹やフジ、クズそれに竹が進入し、人を寄せ付けない状態の里山林でしたが、平成18年12月から平成19年2月の間10日間延べ207人のボランティアで取り組みました。急傾斜の土手は非常に危険でしたが各々注意を払って取り組んでいただいたお陰で怪我人もなく無事完了しました。

つる性の植物が巻き付き間伐した木が宙吊りになり、クローラで引っ張る場面もありました。伐採した竹の処理に困っていたのですが、周辺の農家から水田の暗渠排水に利用したいとの要望があり、大部分を利用させていただきました。良い活用ができたと思っています。残った竹は、会の催し「螢のタベ」の探索路を照らす竹灯籠などに利用します。



整備中



整備前

整備後

### ③整備場所の利活用について

整備した里山林では日陰から脱出したウグイスカグラが花を咲かせ、ショウジョウバカマやイチヤクソウ、シュンランも花を咲かせました。この里山林は「子ども里山探検基地」として子どもの学習や遊びの場として活用する予定です。既に、ある団体から7月末に利用したいとの要望を受けています、会でも「キッズ自然体験」に活用する予定です。

このように毎年活用するには、年数回の笹や雑草の刈り取りが必要で今後整備した里山林を活かすための課題となります。

## 竹やぶが竹林に薙る

太陽光が差込み、野鳥がさえずる竹林

NPO法人 やまと新発見の会／理事長 安井 孝成

710年の平城京遷都から、千三百年の歴史が刻まれようとしている今も変わらぬ奈良の西方、南北10キロにわたって牛が横たわったカタチの山が、標高315メートルの矢田丘陵である。その中央部分の東に面した矢田寺から東明寺に至る近畿自然歩道の中間付近に林立する竹林が、私たちが取り組んでいる“タケトピア”である。

竹林は手入れがされなくなって20年余が経過し、ものすごい勢いで繁茂して里山を侵食している。密集すると太陽光が入らなくなり竹の成長が止まり、立ち枯れの竹が増えるともう中に立ち入れない状況になってくる。恐らく昆虫や動物などは、生息しづらくなり、生態系が崩れているに違いない。



立ち枯れ荒れ放題の竹やぶ



凄まじい枯れた竹

伐採作業はまず立ち枯れの竹を取り除くことから始まる。伐採すると枯れた竹が天から降ってくる。実に始末が悪く、危険極まりない。昨年12月中旬から始まった第一次伐採作業は、2月中旬までの2ヶ月間、悪戦苦闘の連続であった。

この間、延べ200人のマンパワーの威力で見事に朽ちた竹を一掃して青竹だけの竹林になると急勾配の竹やぶは風通しが一気に良くなり太陽光が差込み始めた。2月末から青竹の間引きを主体とするは第二次伐採作業を1ヶ月かけて行い、里山林機能回復整備事業5年契約の面積0.66haのうち初年度分0.11haの整備作業が終了した。

近畿自然歩道を覆いかぶさるようになっていた竹が除去された今、素晴らしい竹林公園の風情を取り戻している。景観形成が向上して最高のロケーションが蘇ってきた。作業しているとウォーキング中の市民が「ごくろうさん」と声をかけてくれるようになったし、周辺住民からは、当初の受け止め方が一変して好意的に受け入れられるまでになったことは嬉しい限りだ。



直径15cmのモウソウチク



整備された竹林

何よりも竹やぶを提供してくれた農家の方が休耕田を作業場として解放してくれたことはその後の作業性を一段と高めることになった。地域住民とNPOの協働が、共生社会の新しいモデルになればと思う。

私たちが掲げている“魅せられる矢田丘陵づくり”は里山林機能回復整備事業によって大きな第一歩を歩み始めたといえる。今後は、切り出したタケ&竹の利活用面の新たなチャレンジが待っている。チップ化、炭化など中間素材にしたうえで、付加価値の高い商材づくりをめざす。

ただ今は、3年先に開催される一大イベントにおいて、平城京に隣接する好立地を活かして「屋根のない博覧会場」をイメージした矢田丘陵を平城遷都1300年記念事業の“タケトピア”にする夢の実現をめざす。

# 奈良市荻町里山林整備

(「はなはなビレッジ」後背地の里山林整備事業)

## 都祁の里山を守る会

代表 阿 部 和 生

“都祁の里山を守る会”は、「奈良・人と自然の会」を母体として有志5名により、平成8年春に発足しました。奈良市に編入された 旧都祁村上荻にある「はなはなビレッジ = 上荻観光農園」の後背里山林の機能回復整備することや、里山整備を通して里山の現状や自然環境の大切さの周知・啓発をすることを目的としています。

平成18年8月【都祁の里山で学び遊ぶ、竹バームクーヘン作り】、10月「間伐林整備後のわさび畑つくり」などの実施が計画され その会場として活躍しました。このため6月の下見から7月8月の真夏の作業、10月、11月の森林整備を主体的に行いました。



整備前



整備後

はなはなビレッジ周辺の整備や背丈を越す散策路の整備を実施しました。都祁森林組合様のご協力の下、危険木の除去作業、枯死木の処理を実行し、少しづつ散策路周辺の整備を進めました。散策路の脇に珍しくなったササユリを見つけたときは感動したものです。「来年もしつかりと葉を茂らせてね」と目印をつけ周辺を手鎌で刈り取ったものです。わさび畑予定地の杉の木間伐は、参加されたご父兄の方の協力も得て実行しその間伐材を利用して湿地に丸太橋を作るなど汗を流してもらいました。

わさび畑予定地に繋がる笹原の刈り取りは、視界が開け明るい空間に様変わりしたものです。地権者の方の「明るく整備されてよかったです」の言葉は、何よりの励みとなったものです。

あれこれと掛け持ちの中の一年目でした。当面の目標は達成できましたが、いま少し丁

寧な作業が必要ではなかったか、作業の時期に関しても早い段階での 計画が必要であろう、あるいは間伐材の利活用が不足していたなどが反省点です。

一方で 自然観察路の整備に伴う活用の促進が望れます。間伐材の利活用としてのシイタケ栽培、放置されたままの感じの里山に、整備とともにコナラの植樹の実施、一般の方を招いての里山林の手入れ実習など「はなはなビレッジ」の活用とともに 森林・里山を理解していただける取り組みが必要であろうと考えています。



湿地にかけた橋



わさび栽培地の整備後



作業終了後集合する。



植栽されたわさび

山の作業は、危険と隣り合わせの肉体労働といったイメージがあります。私たちボランティアの団体の作業は、決してそうしたものではありません。あくまで個人個人の力量に合わせた作業であり、「のこぎり」や「かま」の手作業からの出発です。鬱蒼とした里山を手入れし、充実した時間を過ごし達成感を得る。健康を維持し、仲間と語らい、そうした自分の行動が、いつしか自然環境の改善に結びつき社会貢献に繋がるものとしたら素晴らしいことではないでしょうか。

# 里山林機能回復整備事業への取り組み

## ～虫と子どもがいっぱいの里山をめざして～

### 虫いっぱいの里山づくり隊

#### ① 虫いっぱいの里山づくり隊とは？

「虫いっぱいの里山づくり隊」は、平成17年6月に、橿原市昆虫館内に事務局を置き、自然好きの有志が集まり発足しました。以来、約35名のボランティアが、橿原市南山町にある昆虫館周辺や、「万葉の森」など天の香具山地区にて活動を続けています。私たちは、昆虫を始め生きものがいっぱいの里山を再生し、子供たちが安全・安心に楽しめる環境づくりを目指しています。現在は主として、

橿原市昆虫館の周辺に広がる雑木林にて、森林整備や教育普及活動に携わっています。



#### ② 虫いっぱいの里山づくりの活動

「里山づくり」活動は毎月2回程度実施していますが、平成18年度より、奈良県の「里山林機能回復整備事業」に参加させて頂いている関係で、冬場の活動回数を増やして、整備作業を展開しました。ボランティア個々の都合がありますので、平日と休日の両方に活動しています。

平成18年度は、橿原市昆虫館の東側に広がる雑木林0.4ha(橿原市南山町)に取り組みましたが、長年放棄されてきた雑木林は照葉樹が進出し、更に、日当たりのよい斜面ではササとクズが繁茂して、落葉広葉樹を駆逐しようとしていました。しかし中にはアケビやサルトリイバラなど、昆虫や動物達のために残しておきたい植物もあります。そこで、ササとクズのみを選んで下草刈りを始めました。ところが、ササを完全に刈ってしまうと、ササを食草とする蝶類や営巣場所にしている鳥類が住めなくなりますので、歩道沿いを中心にはササを残しながら進めるなど、工夫しながら作業を進めました。整備地域を一周出来るよう道作りにも取り組みました。その際、行事等の利活用の前には、歩道のササは根元から剪定バサミで丁寧に切り、子供たちが怪我をしないように気をつけました。このような作業は、正直とても手間がかかりました。

また、専門家(NPO森と人のネットワーク・奈良)に来て頂き、危険樹木の伐採も行いました。ほったらかしになっていたクヌギ等の背の高い雑木を切るのは、倒れる方向が予測

しにくく、周囲も混みあっていますので、かかり木になりやすく、私達ボランティアにはとても無理です。伐採された樹木を小切りし、カミキリムシやカブトムシがきてくれるよう枯葉と共に積みました。枯れ枝を中心に剪定作業も行い、昆虫の越冬場所として使えるよう積み上げました。



除伐作業

整備後

### ③ 虫いっぱいの里山で楽しもう

「虫いっぱいの里山づくり隊」だけでは、なかなか利活用まで手が廻りません。そこで、樅原市昆虫館や樅原市昆虫館友の会、NPOやまと自然と虫の会等と連携・協力し、野外観察会や自然素材を使ったクラフト教室などを実施しました。また、ボランティア自身も、整備された里山で昆虫や植物を観察したり、デジカメ講座を開いて、レベルアップを図っています。今後も、里山づくりや利活用に関する自主的な研修会や、子ども達を中心とした観察会や自然体験を計画しています。



キノコ観察会

## 平成 18 年度里山林機能回復整備事業について

北部農林振興事務所  
主査 山下洋史

北部農林振興事務所管内において平成 18 年度に 9 箇所の里山林機能回復整備事業が実施された。事業地の内訳は広葉樹整備が 7 箇所、竹林整備が 2 箇所であった。

平成 18 年度は、里山林機能回復整備事業実施初年度ということで、県、市、町、ボランティア団体みな手探り状態でのスタートであった。

まず、整備の仕方について、これまで北部農林振興事務所職員、市町担当者ともに、里山林の整備の指導経験がほとんどなかった。ボランティア団体のほうが、里山林での施業については経験があったといえるかもしれない。

そのため、奈良県森林技術センターと相談しながら里山林整備の手引きに沿った形で指導することを心がけた。



実施前の荒廃した竹林



実施前の鬱蒼とした広葉樹林



竹の侵入もみられる鬱蒼とした広葉樹林



実施前の鬱蒼とした広葉樹林

また、現地の状況や、各ボランティア団体による里山林整備への思い入れも様々であったことから、出来上がりの状況は画一的な仕上がりにはならなかつたが、実施前の鬱蒼として入り込むことが困難であった広葉樹林や竹林が実施後はすべて光が差し入り込む林(竹林)となつた。



実施後の竹林



実施後の広葉樹林



実施後の広葉樹林



実施後の広葉樹林

場所によっては、今回整備された状況を見た隣接する森林所有者（竹林所有者）から次回は私のところでも行ってほしいとの声も上がっている。

間伐や下刈りを実施することにより、直接利益があるのではないにもかかわらず、地域の自然環境を守るために活動されるボランティアの方々の姿勢に改めて、この事業は、ボランティアの方々の善意が前提にあってこそその事業であると痛感した。

その後の利活用についても、多くの参加者を募って炭焼きや自然観察会を行うなど、多くの方々に里山林の大切さについての学習会を行った。このことにより、この事業の本来の目的の一つである「里山林機能回復整備事業を通じて里山に多くの人が入りこむ」ことについては十分に達成できていると思われる。

地元とボランティア団体とが良好な関係を築きながら、実施を通して、ボランティア団体の方々だけでなく何らかの形で、地元の方々を巻き込んで展開されたことは、大変有意義なことであったと思われる。

## 中部農林振興事務所における里山林機能回復整備事業の取り組み

中部農林振興事務所

主幹 杉本和也

平成18年度に森林環境税を活用した事業としてスタートした「里山林機能回復整備事業」ですが、中部農林振興事務所管内では、管轄地域が都市とその近郊地域であることから、5つの団体がこの事業に取り組んで下さいました。

それぞれの団体は、今回の事業が始まる以前に、里山林の整備や、竹林の整備活動に取り組んでいた団体や、今回の事業をきっかけに整備活動を始めた団体など状況は様々で、経験や知識の違いはあるものの「美しい里山林を取り戻したい！」という熱い思いは共通しており、それぞれ熱心に活動に取り組んで下さいました。

今年度、各団体が活動の場とした里山林に共通した問題は、雑木林への竹や笹の侵入や放置竹林の問題でした。今回の整備で、竹を切り倒し、ササを刈払い、豊かな里山林を取り戻そうとする活動が進められ、それぞれのフィールドは見違えるような景観を取り戻しました。

農林振興事務所の普及指導としては、標準的な整備の方針の説明や、今までの自主的な活動で接することがなかった、周囲測量の技術指導及び、補助申請などの事務処理を実施理解していただくための相談や指導をさせていただきました。



今まで林業普及は、林家や林業界の各種団体など、森林や林業に関する一定の知識や経験をお持ちの方々との仕事が多かったのですが、今回の里山林の整備団体は、今まであまり森林や林業に関係を持っておられなかった方々が多いので、普及員として当然期待される知識や技術を習得しておく必要性を強く感じました。

各団体の活動のスタイルは様々ですが、一部の団体は、整備で伐採した竹を竹炭にして利用を図ったり、竹や笹を束にし、地区の農家に粗朶水路として利用していただいたり、団体の熱意で自由に展開できるこの事業は、森林や竹林の整備のみに留まらず、総合的に環境問題を考える活動にまで発展しているように感じられました。

まだ、初年度であり、整備が完了した面積は僅かではありますが、明るくなつた里山林では、子ども達を対象とした自然とふれあうイベントも計画されているようです。

竹やササを相手にした里山整備は、一度整備しても次の年にはまた新たな竹がどんどん生い茂ってきます。今後、自然とふれあうイベントを企画したり、各団体の交流や情報交換を積極的に行い、活動の輪を広げるなど、各団体の継続した里山管理の活動が期待されるところです。



管内整備地・標識

## 森林ボランティア安全技術研修の実施

森林保全課 鳥獣緑化保護係  
主査 染川知之

森林環境税を活用した里山林機能回復整備事業を既に実施している、あるいは、今後実施する予定のある県内のNPO法人や森林ボランティア団体の指導者等を対象として、平成19年5月26日に大和郡山市矢田町にある「矢田山遊びの森」において、安全技術研修を実施しました。

この研修は、NPO法人や森林ボランティア団体の指導者等に対して、安全な作業の技術を習得し、森林づくりに関する知識や技術の向上を図ることを目的に、森林環境税を活用した森林環境教育の研修の一つとして行っているものであり、18名が参加しての開催となりました。

午前中は「救命救急・応急手当」と題して日本赤十字社奈良県支部の西氏を講師に招き、森林ボランティア活動において実際に想定されるケガ、事故に対処する手法を学びました。

まず、日本赤十字社発行の「救急法の基礎知識～備えあれば安心～」を用いて、救命救急法の救命手当や応急手当について教わりました。

救命手当については、第1に事故発生時の周囲の状況や傷病者の状態をよく観察してから手当を行うことが重要であることや、すぐに手当が必要な傷病者の手当の順序などについて説明を受けました。また、応急手当については、骨折や多量の出血があった場合の対処法等について説明を受けました。

その後、三角巾の使用方法について、自分の体を実験台にあるいは、2人1組になって協力しながら挑戦しました。

手、腕などのケガ、続いて手先、足先、目を傷めた事故等のケースに合わせた三角巾の様々な使い方を実習しました。

次に、骨折に対処する三角巾の巻き方や出血があった場合の止血の実習をしました。腕や手足、指など出血した場合にどこを圧迫するのが効果的であるのか感じとることができました。また、三角巾がなくともハンカチなどを代用することで応急手当ができることも学びました。



三角巾を使った実習

午後からは奈良県森林組合連合会の中井氏、園田氏、上西氏を講師に招きチェーンソー、刈払機のメンテナンス及び実習について学びました。

チェーンソー、刈払機を使用して安全に作業を行うために、日常点検等の定期点検を必ず行うことや作業を行う際の服装の重要性等について教わりました。



その後、3班に分かれてチェーンソー、刈払機のメンテナンスの方法について説明を受けた後、チェーンソーによる伐倒木の玉切り、刈払機による下草刈りの実習をしました。

チェーンソー、刈払機を使用するうえで最も危険な現象である「キックバック（チェンソーのガイドバーの先端上部が丸太などに接触した時にソーチェーンが木に強くはさまれた時などに起きる、チェンソーガイドバーの後ろ方向あるいは上方向への反動のこと。）」を講師の実演により目の当たりにすることにより、ガイドバー先端部上部を使って切断作業を行わないことを再認識しました。



チェーンソー実習



刈払機実習

1日間の研修ということもあり多少慌ただしく、実習をもう少し時間を掛けてやりたいという参加者の声もありましたが、皆さん熱心にいきいきと実習されました。

最後になりますが、今回参加された森林ボランティア等の団体の方々が森林の作業をするうえで最も重要なことは安全に作業することです。今回参加された森林ボランティア団体の指導者の方々にはここで学んだ安全知識や技術をメンバーの方々に教える立場となって伝達していただくことを期待しています。

## 平成18年度里山林機能回復整備事業 実施箇所一覧

市町村名	地 区 名	整 備 団 体 名	林況
奈良市	水間地区	NPO法人きやんす家	広葉樹
	荻地区	都祁の里山を守る会	広葉樹
	阪原地区	緑の会	広葉樹
大和郡山市	矢田地区	NPO法人やまと新発見の会	竹林
天理市	中山地区	中山同友会	竹林
生駒市	西畠地区	いこま棚田クラブ	広葉樹
	小平尾地区	生駒里山を守る会	広葉樹
平群町	鳴川地区	鳴川を守る会	広葉樹
斑鳩町	法隆寺・三井地区	いかるがの里・自然クラブ	広葉樹
橿原市	南山地区	虫いっぱいの里山づくり隊	広葉樹
桜井市	三谷地区	NPO法人山野草の里づくりの会	広葉樹
御所市	櫛羅(くじら)地区	若葉会	広葉樹
	東佐味地区	百体觀音里山クラブ	広葉樹
葛城市	竹内地区	竹内自然を愛する会	竹林
山添村	伏拵(大塩)地区	神野山グリーンクラブ	広葉樹
大淀町	岩壺地区	夢町づくり大淀	広葉樹

## あとがき

本県の森林は、県土面積の77%を占めています。この森林の一部に、荒廃が懸念されるものも見られるようになってきました。県民の生活と暮らしを守るために、土砂流出・崩壊防止など県土の保全、洪水防止や水質浄化など水源のかん養のほか、森林の持つ様々な公益的機能の発揮が求められています。

この多様な公益的機能を有する森林を、県民全体の環境資源として保全するため、県民の皆様のご理解とご協力を得て、平成18年4月から「森林環境税」をご負担をいただき、森林整備等を進めております。この貴重な税金は、手入れの遅れた人工林の間伐や森林環境教育のほか、里山林の整備にも役立てまいります。

森林環境税の使途事業については、税導入の検討段階から、県民の皆様の意見をお聞きしながら進めてまいりました。県民アンケート調査結果では、その税の使い道として、特に「県民が森林に親しむための事業」例えば里山の整備などの実施についての意見が多く寄せられました。このため、里山林の整備が柱の一つとして実現を見たところです。

私たちの生活している周辺の森林は、かつては様々に地域の人々の生産活動に利用され、生活空間の一部としても大きな存在意義を持っていました。しかし、薪炭から石油石炭などへの燃料革命が起こり、また、農業生産面での森林利用の減少とともに、その存在意義は低下し、放置される里山林が多く見られるようになってきました。竹林もまた同様で、利用されずに繁茂して環境が悪化した場所が見受けられるようになってきました。

里山林機能回復整備事業は、都市近郊や集落周辺の、手入れがされずに荒廃した里山林について、NPOやボランティア団体等の参加・協力をいただきながら、景観や機能の回復を図ろうとするものです。

平成18年度の当該事業は、12市町村16箇所において実施されました。平成19年度は、13市町村21箇所で実施される予定です。

この度、7団体から平成18年度の取り組み等についてご寄稿いただき、里山林再生の取り組み事例として、紹介させていただくことになりました。いずれの寄稿からも、森林環境や自然環境などと人間との関わりに対する理念や求められる方向性などが伝わってまいります。さらには、皆様方の取り組みの意気込みやご苦労等もまた伝わってくる内容でした。

県民の皆様からいただいております貴重な税金が、身近な森林や自然環境の改善に生かされますことを願いつつ、その活動内容を紹介させていただくことで、森林環境税の使い道について、ご判断をいただくとともに、ご意見等もいただきたいと存じます。

身近な里山林を地域住民の手で整備し、利用・活用していただくという取り組みは、県の森林・林業施策としては、新たな分野への取り組みでした。また、県民の方々の関心も非常に高いものがありました。以前より、自然環境保全に様々に取り組まれてこられたNPOやボランティア団体のほか、このために新たに立ち上がっていただいた団体も多くありました。そのいずれの団体からも、打ち合わせの段階から、前向きな質問や提案等が多くなされ、熱心な姿勢が伝わってまいりました。事業の実現に向けて様々な課題がありましたが、関係者と重ねた協議のなかから、解決に向けて多くの示唆をいただきました。

森林での作業は、簡単そうに見えますが、実は、見た目よりはるかに難しく危険なものです。このため、県では、機械作業やケガの応急処置などについて履修していただけるよう、森林ボランティア団体のリーダーのための安全研修を重要な施策として位置づけ、平成16年度から行ってまいりました。この研修では、活動中の危険を想定して、危険を避けるための知識や基本動作等を身に付けていただくことをねらいとしてきました。里山林の整備では、受講された方々の指導のもと、ここで学んだことを生かしていただき、大きな事故もなく作業されていることについて嬉しく思っています。一瞬の不注意や油断から事故が発生します。各自が自戒され、起こううる危険を回避して、楽しい活動となりますよう希望しています。

里山林の整備の目的は、団体により様々です。しかし、整備の結果は、想像を超えて様々な効果を生んでまいります。効果として、例えば、良好な景観の回復、山地災害の防止、ゴミなどの不法投棄の防止、野生獣による農林作物被害の軽減、野草・野鳥・昆虫など生物との共生、健康や癒しの場、課外体験学習の場、地域住民との交流の場など、書き上げればきりがありません。さらに、このような地域環境の改善への取り組みを通して、地域住民の方々が、地域の誇るべきものの再認識や地域のあるべき姿を考えていただく機会となれば幸いです。

里山林は、利用や活用をされることで生きてまいります。継続的で地道な取り組みが欠かせません。いろいろと楽しみを見つけることで、困難を乗り越えて欲しいと願っています。

この小冊子が、里山林の様々な利用・活用の参考とされ、今後取り組まれる方々の一助となり、里山林整備の取り組みの裾野の拡大につながり、里山林の再生のきっかけとなれば幸いです。